主日礼拝説教　2020 年 9 月 6 日

人の忍耐と神の忍耐　ペテロ第二 3:8～13

8,しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。
9,主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。
10,しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。
11,このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょう。
12,そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。
13,しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。

今年はコロナ禍のために生活のすべての面で影響を受けております。人と話をする時はマスクをつけること。自分の手はもちろん、触れる可能性のあるところは絶えず除菌をすること。集まってはいけない。大声出してはいけない。家を出て遠くに出かけてはいけない。新しい生活様式とは相当不自由なことのように思います。こういう日を過ごしながら私の頭にいつも浮かんでくるのは「忍耐」ということばでした。そしてあまり経験したことのない今年の夏の暑さ。これにもまた頭に浮かんできたのは「忍耐」ということばでした。ただクーラーがある家は珍しい時代に育ちましたのでこれも忍耐で乗り切るべきものと思っていましたら、クーラーつけないと熱中症になる可能性が高く、命の危険性があると言われて、最近やっと「もう暑さは我慢すべきものではないのだ」と思うようになりました。昔は家でも学校でも「暑い、暑いと言わないで、ちょっとぐらい我慢しなさい。」と叱られていましたが今は下手すると一種のパワハラになってしまうようです。

聖書は何事も約束のものを手にし、それを「待ち望む」のには忍耐が要ることを教えています。「こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。」（ヤコブ 5:7）とあります。

忍耐ということで思い浮かんでくるのはクリスチャン画家の星野富弘さんのことです。星野富弘さんは今年 74 歳になられます。24 歳の時、体育教師としてクラブ活動の指導中に頸髄を損傷し手足の自由を失った星野富弘さんは、返事を書きたいとの思いから入院中に口に筆をくわえて文や絵を書き始めます。来る日も来る日も練習されました。その時の様子をこう言っておられます。「1972 年 12 月、わたしはスケッチブックの最初のページに、ひとつの文字を書きました。かたかなで『ア』と書いたのが最初でした」「つぎの日も、そのつぎの日も、横むきになるのがたのしみでした。字が書けたといっても、ミミズがのたくったような字ですが、一字でも、一本の線でも、なんにもできないと思っていたわたしにしてみれば、スポーツで新記録を出したようなよろこびでした」そして段々と詩が書けるように、さらにはお見舞いに持ってきてくれた花に心が集中し、花を描けるようになってゆかれたわけです。やがて書かれた詩と花は人々の心を打ち、以後、全国各地で開かれる詩画展は、大きな感動を呼び現在も続いています。

聖書には、忍耐によって約束のものを手にした信仰者のことが、数限りなく書かれています。

ノアは何年もかけて箱舟を作り、洪水となって水が引くまで、一年間も箱舟に閉じ込められていました。ノアの箱舟は、サッカーのコートぐらいの大きさがあったと言われています。結構広いようですが、そこには様々な種類の動物と、その食糧が満載されており、ノア夫妻と三人の息子夫妻がそこで生活するには窮屈だったに違いありません。

洪水が起こったとき、空は厚い雲で覆われ、昼間でも太陽が見えませんでした。その暗黒の空から滝のような雨が降り、地は裂けて水が溢れ出しました。箱舟は今にも沈みそうになるほど、揺れに揺れたことと思います。そんな日が四十日も続きましたから、箱舟での一年は、10 年にも、20 年にも感じられたのではないかと思います。雨がやんでも、外は一面が水、また水です。箱舟は到着すべき陸地を失いました。そのときの不安はどんなだったかと思います。

しかし、ノアは待ちました。じっと、水が引いていくのを待ちました。やがて船底が地面の上に着きました。ノアはハトを三度放って、水が乾いたことを確かめました。けれども、まだ箱舟から出ることなく、なお数カ月待ちました。ノアは神が「箱舟から出なさい」と言われるのを待ったのです。

わたしたちの人生には、ノアのように、何もできないで、ひたすら時を「待つ」しかない場合が多くあります。そんな時、忍耐を試されます。「奇跡が起こる五分前に信じることをやめてはいけない」という言葉があります。あと、ほんの僅か、あと一日、忍耐していたら、結果はもっと良くなっただろうという後悔は、皆さんも経験されたことがあると思います。ノアも長い人生でそんな失敗をしたこともありました。しかし、彼は失敗を教訓として、神の言葉があるまで、忍耐して待ちました。そして、その忍耐は報われ、ノアは洪水の後の新しい世界を切り開いたのです。

アブラハムは、召命を受けてから約束の子イサクを得るまで 25 年かかっています。アブラハムは神の約束を待ちきれずに、勇み足をしてしまいましたが、もう一度信仰に立ち返りました。そして、忍耐の後に神の約束の成就を見ました。

兄弟から疎まれ、ついにはエジプトに売られたヨセフは、13 年の間、不遇の時を過ごし、忍耐を強いられました。しかし、彼の「信仰の忍耐」は報われ、エジプトの宰相となり、家族を救う者となったのです。聖書には数多くの信仰の忍耐を経験した人の生きた証しが満載です。

しかし、どんなに忍耐しても、結果が見えないときもあります。みなさんにもそういう時があったかもしれません。知り合いの牧師先生が言っておられたことですが「問題が大きな岩のように私の前にたちふさがりました。神が『それを押してごらん』と言われたので、私は懸命にそれを押したのですが、どうしてもその岩は動きませんでした。私は『神さま、岩は少しも動きませんでした。何も変わりません』と不平を言いました。すると、神は言われました。『いや、変わったことがあるだろう？ ご覧、あなたの腕は強くなっている。』私が岩を押し続けている間に、岩は動きませんでしたが、腕が強くなりました。問題は即座に解決しませんでしたが、神は、私を、問題に取り組むのにふさわしい者にしょうとされたのです。」こんな話をされていました。信仰による忍耐は決して無駄に終わることはないのです。

ローマ 5:4-5 に「忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません」とあります。たとえ患難があっても、忍耐を働かせるなら、希望が生まれます。「希望は失望に終わらない。」なんと確かな言葉でしょう。しかし、「忍耐」からすぐ「希望」に至るのではなく、「忍耐」と「希望」の間に「練られた品性」があることを忘れないようにしましょう。「練られた品性」とは信仰者にふさわしい資質のことです。「練られた品性」とは一つの言葉なのですがこの言葉には「合格証」「証明書」という意味があります。様々な製品は工場で作られた

あと、検査に回され、検査に合格すると「合格」という印をつけられてから出荷されます。神は、忍耐を通して、信仰者をみこころにかなうものに作りあげてから、確かな希望へと導いてくださるのです。「練られた品性」は信仰の忍耐が与えてくれる、かけがえのない実なのです。

最後にこのように、神様は、わたしたちに「忍耐」をお求めになりますが、じつは、神ご自身が、大きな忍耐をしておられることを、皆さんは、考えたことがあるでしょうか。

今朝の箇所は、キリストの再臨を忍耐して待つようにと、教えています。ペテロがこの手紙を書いたとき、クリスチャンは迫害の只中にありました。多くのクリスチャンが財産を奪われ、町を追われ、難民となりました。投獄され、拷問を受け、殉教する人々が増えていきました。信仰を持つ者に患難がやってきたのです。しかし、信仰者は患難に耐え、敬虔な生活に励み、希望に生きました。初代のクリスチャンは、キリストが今にも再臨して、迫害を受けている自分たちを救ってくださることを期待しました。しかし、その時代には主は再臨されませんでした。

クリスチャンが再臨を待ち望んでいることは、一般の人々も知っていることでしたから、人々は、「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。」（ペテロ第二 3:4）と言って、クリスチャンをあざ笑いました。クリスチャンの中にも「ほんとうに主は再臨されるのだろうか」という疑いも起こってきました。

その初代教会から二千年経ちましたが、再臨はまだです。それで多くの人々は、「キリストが再臨を約束されて二千年も経っている。もう、その約束は自然消滅したのだ」と考えるようになりました。しかし、ほんとうにそうでしょうか。神の約束は「二千年」という時間が経てば変わり、反故になるようなものでしょうか。いいえ、神の言葉は決して変わりません。今日のみことば「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」（8 節）というのは、神の言葉が変わらないことを教えています。しかも 9 節では、今まで再臨が延期されてきたのは、神の忍耐のゆえだったと教えられています。こう書かれています。「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」（9 節）

再臨の日、それは、イエス・キリストを愛し、キリストが来られるのを待ち望む人々には救いの日ですが、そうでない人々には、審判の日です。その日は、最終判決の日で、そこでわたしたちの永遠が決定されるのです。憐れみ深い神様は、ひとりでも多くの人が、悔い改めて、キリストの救いにあずかることができるようにと、審判の日を先延ばしして、待っていてくださるのです。ですから、「二千年も経った今、再臨などないのだ」と言う人は、神が二千年の間、「御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠の命を得るため」（ヨハネ 3:16）に、忍耐を尽くして待っていてくださる、言わばその愛を踏みにじっていることになるのです。

イエス・キリストは、みずから進んで十字架を取り、その苦難を耐え忍ばれました。キリストはそれによって、神の忍耐を身を持って示してくださいました。わたしたちには、自分ひとりで忍耐する力はありません。わたしたちに必要なのは、わたしたちを忍耐して待ってくださっているこの神の愛です。キリストが、わたしたちに代わって耐え忍んでくださった、その忍耐です。テサロニケ第二 3:5 にこうあります。「どうか、主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせてくださいますように。」この祈りを、わたしたちの祈りとしましょう。そして、忍耐によって練られた品性を得、練られた品性によって、確かな希望へと導かれていきたいと思います。